

## 情報史研究の枠組みと方法論

### The framework and methodology for the history of information

村 主 朋 英  
*Tomohide Muranushi*

#### *Résumé*

The objective of the study is to search for the framework and methodology of the historical study of information. The notion of 'the history of information', proposed by Norman D. Stevens, is analysed and subjected to theoretical considerations. The historical works related to the history of information, including the works published in Japanese, are analyzed, and their properties and problems are pointed. Grouping those works, five categories of factors in the history of information are identified, and their interrelations are listed. Categories identified are: systems for information, the field of information science and the notion of information, communication activities, whole bodies of societies and politico-economical systems, knowledge in objective sense. The framework for the history of information is discussed with consideration of the idea of 'informational conception of history' proposed by Toshio Kitagawa. It is pointed that formation of the framework should be linked to fundamental studies of information phenomena. Some normative studies for the historical study of information are reviewed, and brief guidance to the future study is made.

- I. はじめに
  - A. 本論の目的と範囲
  - B. Stevens による概念規定
  - C. 用語法と定義
- II. Stevens の情報史構想
  - A. Stevens の企図
  - B. 情報史研究と情報学
  - C. 情報化社会論と情報史

---

村主朋英: 愛知淑徳大学文学部図書館情報学科, 愛知県愛知郡長久手町片平 9  
Tomohide Muranushi: Department of Library and Information Science, Aichi Shukutoku University, 9,  
Katahira, Nagakute-cho, Aichi-ken, 480-11 Japan  
1994 年 11 月 28 日受付

- D. Stevens の方法とその限界
- III. 情報史研究のグループ化
  - A. 情報システムの歴史
  - B. 情報学の歴史・情報思想史
  - C. コミュニケーション史
  - D. 情報学以外での試み
  - E. 客観的な意味での知識の歴史
  - F. 情報史の五つの側面と Stevens の枠組み
- IV. 情報史研究のための戦略
  - A. 北川敏男の情報史観の概念
  - B. 情報史の枠組みの形成と個別の研究
  - C. 個別研究のための指針
- V. 総括と展望

## I. はじめに

### A. 本論の目的と範囲

1986年に、Norman D. Stevens によって情報史 (the history of information) という用語が提示され、包括的な情報史研究の構想が示された<sup>1)</sup>。

しかし、現時点では情報学の中核で機能するような情報史研究領域が成立した形跡はなく、そのために本格的な情報史研究が展開されない状況にある。

その素因は「情報学研究者の数が少なく研究領域形成の組織的基盤が弱い」といった現実的な問題かもしれないが、より重要な原因は、Stevens による提案において理論面の考究が不十分であることだろう。彼は興味深い歴史像を示すために、基本史料を精選して示した。外にも彼の企てを推進するための材料 (史料) は非常に豊富である。しかし彼は、それを統合する枠組み (あるいは歴史観) を明示的に追究していない。そうした要求に合致するものは、情報学分野全体を見渡しても、見いだされない。これが方法論や研究戦略の面での弱点につながっている。

一方、B. C. Vickery と A. Vickery の著した情報学に関する包括的な入門書<sup>2)</sup>において、序論 (第1章) の冒頭で情報・コミュニケーションの歴史が略述されている。都市という環境に焦点を絞り、要諦を捉えた記述である。彼らはそれに引き続いて、情報に関わる専門職と学術分野の発達を略述し、さらに情報学の定義および情報学の範囲を論じて序論を終えている。そのあと、情報学における個別のトピックについて順に扱うという構図で

ある。

彼らは、人類の歴史における都市の発生・発達の重要性に着目し、そこに絞って歴史記述を行なっている。そして、都市における社会の発達を描きながら、コミュニケーションの行われる場所や方法、コミュニケーション活動の変遷、および情報要求の増大の相関を記述している。

Vickery らは、情報学についての説明の導入部として情報に関する歴史記述を置いたことにより、情報史の探求の重要性を示唆している。さらに、情報学研究者が視野に収めるべき歴史的事象を指摘し、また一方で情報に関わる歴史を記述するための観点のとり方を情報学研究者の立場から示唆していると評価できる。とはいえ、彼らの仕事はあくまで略史に留るし、歴史に対する観点も定式化されたものではない。つまるところ、彼らの示唆した点を明確化し、こうした営為をもっと組織的に行うことが情報史の確立のための課題であろう。

情報史における歴史観の問題は、情報に対する考え方の問題と連動する。ここを看過して安易に情報史の記述や個別トピックの研究に取り組んでも、厳密さや分析性を欠いた曖昧な成果しか得られないだろう。本格的な作業に実際に入る前に、歴史観に関する基礎的考察をもとに、情報史研究の理念を確認する必要がある。

このほかの問題としては、日本における情報史関連の試みのレビューが残されている。Stevens は、日本の文献に言及できなかったことを自ら強調しているが、実際に日本においてこの種のアイディアが古くから示されており<sup>3)</sup>、後述のようにいくつか試みもみられる。それらは

Stevens の枠組みに組み込むことのできる部品というより、別の立場から Stevens と同様の問題提起を行なった、別バージョンの情報史といえる。ただ、後述するように、興味深い試みも数多い一方で問題点も指摘できる。情報学に関係している研究者の試みもふくめ、厳密性と多面性という点で Stevens の提案に照して不十分である。これらをどう扱うべきかという問題が残っている。

本稿では、このような問題状況を受けて、まず情報史の概念規定の問題から始め、既存の著作から情報史の諸側面を識別し、情報史研究のための枠組みと実際に研究を進めるための戦略・方法論の検討に及ぶ。

## B. Stevens による概念規定

情報史専門の学会や雑誌が現れるなどといったかっこうで、情報史に関する研究領域を確認できるわけではなく、情報史のテキストブックと見なされるような業績も見あたらない。このことは、情報史という語の公式の標準的な定義が存在しないということを意味する。

Stevens 以外の情報史関連の著作（後に引用するもの）においては、明晰で示唆的な定義は見受けられないし、定義づけの努力もほとんど見られない。情報史という概念を既定の（自明の）ものと捉えている論者が多いのかもしれない。しかし、この語（とくに日本語の「情報史」という熟した形）は、どのようにでも受け取られる両義性を持つから、明確な定義づけの営為を要する。

出発点として、「情報史とは情報に関わる諸事象に関する歴史である」という素朴な定義を設定してみよう。しかしこの定義では、対象の範囲も示されていないし、歴史としての特質も明らかではない。やはり、もっと精緻な定義が必要である。

Stevens は、「情報史の概念が認知され受け入れられること」<sup>1)</sup> が情報学に対して益するという考えを表明し、論文の目標として「情報史の概念の重要性を示唆」<sup>1)</sup> することを掲げているが、この語の定義を積極的には示していない。かわりに、序論（第1章）において、情報に関わる歴史研究の現状や、情報史のあり方に関する見解を展開している。しかし、こうした箇所に彼の概念の現れが見いだされるものの、Stevens 論文の言い回しはやや冗長であるため、以下では彼の記述を解釈し、接ぎ合わせることによって、彼の定義を合成する。

まず、Stevens 論文の序論において問題意識が提示されているが、これに基づいて、「情報を人類社会の歴史の

展開における要因と考え、情報が社会の発達に与える影響に力点を置いてとらえた歴史」という第一の規定を引き出すことができる。

Stevens はまた、別の方法で情報史の概念を説明している。つまり、情報学が誕生することによって図書館学の枠が広げられたとするなら、それに対応して図書館史を大きく拡張し、情報の問題一般を扱う歴史研究を考えるべきだと論じており、ここから第二の規定を引き出すことができる。「図書館学にとっての図書館史と同様のものとして、情報学に対しては情報史を構築すべきである」というものである。

もちろん、彼の提案の趣旨は、「図書館史に加えて（あるいは図書館史に代えて）情報技術（計算機・通信技術）やマスコミに焦点を据えて歴史を描こう」という単純なものではないだろう。第一の規定に集約したように、「あらゆる情報の問題を扱い、さらにそれらを社会の歴史の全体の中に位置付けて描こう」というものであると解釈できる。

以上のように識別した概念は、Stevens 論文における戦略と切り離しては考えられない。彼は、序論におけるこのような記述に留らず、情報史のあり方について、情報に関心を持つ立場から歴史の流れと歴史における主要な問題とを示すことにより、著作全体を通じて彼の念頭にある方向性を表現しようとしたものと認められる。そこで、この概念について理解を深めるために、彼の構想全体を検討していく必要が生ずるが、次節ではまず用語法に集約してさらに検討を加え、より単純な定義を与えておこう。

なお、補足であるが、Stevens は、「社会」よりも「文明」という語を好む傾向にある。つまり、情報を社会という文脈の中で捉えるというよりは、文明の発達過程の中で位置付けるという感覚を持っているようである。この点は彼の歴史観を特徴づけている一要素かもしれないが、より中立的な「社会」または「人類」という語を本稿では使用する。

## C. 用語法と定義

まず、「歴史(history)」という語であるが、この語は、過去の出来事そのものを差す場合と、認識あるいは叙述されたものを差す場合に大別される<sup>4)</sup>。認識と叙述のどちらが先行するか、そもそも「過去の出来事そのもの」を存在として認めるかといった根本問題もあるが、暫定的にこれらを分ければ、歴史とは一般に以下のような三

つのレベルの概念が重層しているといえる。

- (1) 過去（の一連の出来事）
- (2) 歴史像または歴史認識（認識主体が(1)の意味での歴史を把握・解釈することにより得るもの）
- (3) 歴史叙述（歴史認識を記述したもの）

これに加え、この語は、歴史研究という行為、さらに歴史研究の領域に対する表示ラベルとして用いられることもある。場合によってはそうした多面性を意識せずに曖昧に用いるような例もあるだろう。

Stevens に関していえば、序論において、「情報史という研究領域」および「情報史という概念」という二種類の語法が見られ、「情報史を書く」という語法も用いられている<sup>1)</sup>。このように、こうしたレベルを意識はしながらも、語法の上で厳密に区別はしていない。しかし、彼の構想を普及させ、また実現するためには、これらを区別するような用語法を採用し、議論の整理を図ることが有益であろう。

つぎに、Stevens のテキストにおける「情報」は、非常に広い含意を持つ。彼は論文の前半で、情報史ではなく情報の定義について概観し、情報史を考究するにあたって情報概念の範囲をもっと拡張すべきであると論じている。さらに、彼のテキストにおける情報という語の用例を見ると、伝達された事柄や知られていることだけではなく、そうした事柄を伝達する活動または過程といった動的な因子、伝達や蓄積に用いられる道具・技術の機能・効果、それらに関わる社会機関や制度の問題までを包括的に（または場合によって遷移しながら）指示していると推定できる。つまり、用語法が広範囲に拡張されている。そのように解釈しない限り、たとえば“情報の最近の段階”<sup>1)</sup>という言い回しに見られるような、一見すると無頓着に見受けられる用語法を理解することはできない。

彼の意図は、実際には情報の概念規定そのものではなく、情報史の対象の範囲を広く採ることにあったと考えられる。また、後述のように、情報の概念の問題は、情報学のみならず情報史の研究を進めながら継続的に追究すべき課題と考えられ、少なくとも基本的な定義の段階で限定を加えるべきものではない。そこで、ここでは、情報の定義の問題を留保し、Stevens の情報の概念における包括的な性格を尊重しておく。

このようなことから、歴史という語の問題のみを考慮して用語法を整理し、以下のような定義づけを行なう。

まず「情報史研究」について、「社会的文脈（政治・経

済・文化等）において、情報がどのように影響を与え、またどのように扱われてきたかを歴史学的方法によって追究する行為」と定義する。

たとえば以下のような点が情報史研究において探求される問題とされよう。特定の活動や機器・技術・方式が情報流通過程にどう影響し、さらに社会に対してどのような意味を持っていたか。とくに情報学やその原形となる活動分野が（実践および学術の面で）どのように関わったか。情報活動においてどのようなことが試みられ、何が問題として残っているか。今後、情報技術の進展が情報活動や人間の情報との関わりにどのように影響を及ぼし、どのような社会の変化をもたらすか。

なお、情報史研究において取り組むべき問題については、Stevens 論文<sup>1)</sup>において、全体に関わるものと各論的なものの両方がいくつも挙げられており、今後の作業としてその体系的な整理を行なうことが有益だろう。

つぎに、慣例にしたがえば、そうした行為を組織的に行なう専門領域の名称に情報史という語を適用することも可能である。しかし、本稿ではその場合は「情報史研究領域」と称して区別する。

最後に、情報史研究を通じて得られる歴史像を「情報史」と呼ぶ。

このような区別を一般に強制することは困難だろうし、この三者も結局は、情報史という単一の語の用法のバリエーションとなっていくことも予想されるが、少なくともこうした区別に対する意識を喚起しておきたい。そこで、本稿では用語法の上で区別を堅持する。

まずはこのように、本稿の語法は「情報史という対象があって、それを探求するのが情報史研究」というものではないことに注意されたい。つまり、「情報に関わる史実」「情報史研究の探求する対象となる時空間」といったものについて、特別な呼称を用意しない。

また、情報史研究によって生み出される文献（情報史研究の成果）の呼称も特に用意しない。場合に依じて、「情報史を記述した著作」「情報史研究領域の論文」といった語法を採る。歴史記述（叙述）に関しては、情報史研究を通じて歴史像を得てからこれを忠実に書き記すということが行われると考えることもできるし、記述されたものを解釈することにより歴史像が初めて生ずるものとも考えることもできる。しかし、少なくとも研究者どうしでは、「作者と作品と読者」という三角関係が固定するわけではないから、「記述されたものを媒介として表現および理解という行為が繰り返される一連の過程があ

る」だけ考えることが妥当であろう。これは歴史研究という行為に等しいから、結局のところ、記述されたものの単体を強調する必要がないことになる。

これらの点については、本来は詳細な歴史哲学の議論が必要であるし、歴史学や歴史哲学において蓄積されている論考の検討は、情報史の今後の展開にも大いに益するだろう。たとえば、歴史の類義語として記録・記憶、知識・探求、また物語といった用語について検討することや、史料や史実と歴史観との関係を論ずることは有益だろう。

しかしこうした問題はこれ以上ふれない。ここでは、情報史に関する基本的態度を示すために、「情報史は既定のものではなく、これから構築（合成・再構成）するものであること、そしてまず確立すべきものは研究の体制である」という考えを反映した上記の定義付けを行なうに留める。

さて、the history of information という語の訳語としては、「情報史」のほかに「情報の歴史」という表記も見られ、Stevens とは無関係の文脈においても、両方が見受けられる。これに対して、本稿では、簡潔であることと、すでに翻訳版により流布しているという二つの理由から「情報史」という語形を採用する。

ただ、いずれにせよ、定義に留らず、より掘り下げた理解を行なわないことには、用語が一人歩きする危険がある。また、正統な研究領域の下で情報史研究を推進するためにも、次章でまず Stevens の構想を概観し、情報史の概念を掘り下げよう。

## II. Stevens の情報史構想

### A. Stevens の企図

Stevens は「情報について現代的な関心を寄せ、歴史的な視野において検討をはじめの必要がある」<sup>1)</sup>と述べている。これが彼の考える情報史研究の目的であり、また情報史研究領域という新しい分野の構築を目指す理由であるといえよう。

さらに彼は、そうした領域が成立すれば、情報による社会への貢献や文明の進歩・発展への影響がどのようなものであるか探求することが可能になると述べている。これは情報史研究という主題領域の全体的な研究目標と位置付けられる。また、このことにより、彼の企図は情報学における歴史研究領域の確立という方向に留らず、「人類社会の歴史に関して情報を鍵として描く（再解釈する）」という大きな構想であると判断できる。

このように Stevens は、初心者のための教養や、専門分野の発達系の譜を越えた、戦略的な情報史の可能性を示した。

各種の機関やサービスの変遷や、技術・製品に関する編年を中心とした歴史ならば、情報学・図書館学に関わる者の基礎知識を提供するために多くの文献が提供されている。一方、過去の重要な事件に立ち会った古参の研究者や実務家の経験を記録に残すことは十分には行われていないようだが、その意義ははっきりしているし、理論面での困難さはない。また、ある事柄について論ずる際、導入部でその起源について言及したり、説明のための例証を歴史上の事項に求めたりすることも、既に広く行われている。こうした目的なら、わざわざ情報史という概念を提唱しなくても支障無く進行するだろう。

これに対し、上記の概念規定に Stevens の構想の基本的発想が集約されている。本章では、これらを詳論することにより、彼の構想の詳細と問題点を検討する。

### B. 情報史研究と情報学

まず、情報史研究・情報史研究領域に関する Stevens の見解を検討しておこう。

上記の第二の規定に関連して示されている Stevens<sup>1)</sup>の指摘によれば、こうした研究は専従の研究領域で系統的に行われてきたわけではない。これまでは、関連諸分野（情報学、歴史学、あるいはその他の類縁分野）において、断片的に行われてきたものである。

こうした状況に対して Stevens は、図書館史・コンピュータ史・書物史・コミュニケーション史等を統合し、さらに人類学・一般の歴史学・社会学等の分野の研究を巻き込むことによって情報史研究領域という統一分野が形成されるものと考えている。そうした個別分野の成果を糾合したのち、情報史研究領域という専門の分野で成果を蓄積することを彼は望んでいる。

Stevens の構想の意義にいち早く着目した津田良成は、とくにこの学際的な性格を重要視した<sup>5)6)</sup>。

彼の記述によれば、Stevens の提案の背景には、まず図書館員やドキュメンタリストの扱う対象の本質が「情報の単なる物理的な容器ではなく」<sup>6)</sup>、情報にあることがわかってきたという状況がある。この状況を反映して図書館・図書・印刷などの歴史概念を統合した情報史の概念が提唱されたことになる。このように問題の焦点を情報に据えたと、Machlup ら<sup>7)</sup>が示したような数多くの領域との競合・協調が問題となる。津田によれば、この学

際性という点では、Stevens は種々の領域の歴史研究の成果をうまく組合せて統合的なレビューを構成しており、さらに個々の領域に依存しない情報史の各論を列挙していることが評価できる。

こうして津田が Stevens の構想を論ずる際に、情報や図書館に関する歴史叙述の文脈ではなく、情報に関する研究領域の発展過程の中に位置付けて紹介していることは注目に値する。つまり津田の評価によれば、この試みは情報に関する新たな考え方を示したものである。

学際的なアプローチは、とくに情報という捉え難い対象に関しては困難を伴うが、情報史の探求に関してはうまくいくかもしれない。さらに、歴史研究という場面で、具体的な例証を共有しながら考究を進めれば、逆に、情報研究に関わる諸領域の連結に寄与するかもしれない。

このように、彼の構想は「情報学における歴史研究が不十分である現状を鑑みて、その革新を企図する」というものに留らず、情報学という分野の基盤形成とも連関するものとなっている。

また、言うまでもなく、情報学における方法論の充実のために、歴史学の成果や方法論を導入することは有益だろう。情報学においては、歴史を対象として研究することも本格的には行われてきていないし、図書館史という限られた範囲を別とすれば、明示的に歴史学的方法を導入することもなかった。このように歴史研究があまり見られない情報学において、歴史の観点から、情報に関する有益な知見が得られる可能性がある。

以上のいくつかのポイントを軸に、情報史研究の意義を捉えなおせば、以下のように整理することができる。

- (1) 歴史学的方法に基づく情報研究としての貢献
  - a. 歴史をたどることにより、情報に関わる社会的活動や制度、また技術・技法の役割の理解が深まる
  - b. 情報の機能、そして情報の本質を考究する際に、具体的な事例が広く得られる場を提供する（実証や実験の場にはならないが）
- (2) 情報学という分野の成立への貢献
  - a. 情報学、もしくは学際化された情報研究領域の統合のために、歴史認識の共有を促す
  - b. 多様な現象のうちで、どれが情報の問題に深く関わる現象なのか、あるいはそれら現象の相互関係はどうなっているか。このことについて、抽象論・一般論ではなく歴史における事象をも

とに考えることができ、学際化の枠組みを検討する材料が得られる

このまとめにも示されるとおり、Stevens の構想する情報史研究は、情報学の核心に触れるものである。あるいは、そうしたレベルに達してこそ、情報メディアや図書館、あるいは情報流通過程の将来に対して、有益な洞察を提供できるだろう。

### C. 情報化社会論と情報史

つぎに、情報史に対する基本的な観点を検討する。

上記 Stevens の第一の規定は、まず彼が論文冒頭で表明したテーゼに現れている。彼は“情報はさまざまな形態を取りながら人間社会の発展において常に重要な要素であり、そして、長期間にわたってわれわれの思考や行動の様式に影響を与えてきた”<sup>71)</sup>と述べ、人類が情報時代という新たな段階に突入したという見方を否定している。そして、現代に限らず、人類の発達過程におけるすべての段階はいずれも情報時代と見なすことができるというテーゼを表明する。

また Stevens は、その論文全体を通じ、古代社会から連綿と続く人間と情報との関わりを示すことによって彼のテーゼを裏付けている。このように、このテーゼは彼の情報史に対する観点を特長づけているといえる。

このテーゼは、いわゆる情報化社会論の観点に対比できるものとして提示されている。彼自身は詳細な批判的議論を展開しているわけではないが、このテーゼは情報史に対する基本的なイメージを示すものであり、彼の構想の根幹にあたるものである。したがって、その含意を十分に検討しておく必要がある。

ここでいう情報化社会論とは、Daniel Bell や Alvin Toffler を代表とするいくつかの論者の見解を包括する概念であり、先駆的な梅棹忠夫をはじめとして、日本においても独自の展開を見せた思潮である<sup>89)</sup>。

思潮といっても、論者ごとの見解の相違もあろうし、同時代の先端技術の特質や社会の状況により発想が影響されて、発表時期により論旨が異なることもあるだろう。このため、一括した議論は危険を伴うが、少なくとも本沢<sup>90)</sup>および小松崎<sup>91)</sup>の挙げる論者に共通する論点として、以下のものが識別できる。

- a. 通信・コンピュータ技術の技術革新により、経済・産業構造の変化が見られる
- b. 物質・エネルギーではなく、知的財産または付加

価値に社会の関心の焦点が移る

- c. マスメディアの形成と相俟って、生活および文化において広範な影響がある

そうした思潮への批判も多く、新しい技術・製品が潜在的に有する危険性や、効率偏重の政策・経営方針による人間疎外、あるいは国家権力・大企業による経済的独占や政治的統制といった問題点を指摘する論点が存在する。こうした批判を進めたものが Slack らのオムニバスの論文集<sup>10)</sup>である。そこでは情報時代と呼ぶことのできる社会の実相と“情報時代における支配的イデオロギー”<sup>10)</sup>の分析・批判が多様な立場から展開されている。

しかし、これらの批判はいずれも、ある意味で情報化社会論と同一の土俵にあるといえる。異なる時代の社会形態もしくは社会構造を比較に基づいており、肯定的にせよ否定的にせよ、現在や将来の動向に関する考察であるという点が共通している。

これに対して、情報化社会論の発想そのものに対する批判も存在する。本沢<sup>9)</sup>は、図書館情報学において情報と社会に関する議論が不足していると指摘した上で、一般において流布している情報化社会論と総称される種々の論を網羅的に検討した。これに関与する論者の個々の主張を概観し、それらが食い違いを含みながらも次第に収斂する過程を論じている。そして本沢は、「情報化」という語がそうした収斂の接点になるとともに、相異なる論者の議論が収斂する過程で曖昧さを増したと指摘する。こうした考察を受け、彼は社会に生ずる現象の中で情報化という語に相応しいものは何かという点を模索しながら、人間と情報の関係の捉え方を検討した。

情報化社会論に共通する特質として、本沢が捉えた点は以下の二点である。まず、中心的な産業を基準に農業・工業・情報産業の三つの時代が想定され、時代の転換が革命的な飛躍を伴うと考えられている点である。もう一点は、「情報革命」という語に象徴されるように、近年の技術革新による社会の革命的变化により、一転して情報が中心になる社会が生ずるという点である。

さて、これらにも見られるように、情報化社会論は時間軸に沿った分析を伴い、一定の歴史認識を内包している。つまり、歴史的アプローチに構造的に依存している。そこで、このような歴史認識について、本沢の指摘した二点を軸に、情報史との関連で論じよう。

ここでは、梅棹忠夫<sup>11)</sup>の所論を検討する。梅棹は情報化社会論の代表例として引き合いに出されることが多く、Daniel Bell ら日本以外の論者と同時期に独自に情

報化社会論に関連する論考を発表していた点で先駆的論者である。

彼は1962年から「情報産業」という概念を提唱し、それに関する自らの考え方を展開してきたが、その中で歴史の流れを概説するという手法をたびたび用いている。

彼は、ここ数十年の情報技術の進展を「史上最大の情報革命」であると評価する。そうした進展によって、放送・出版のみならずコンサルティング業等も含む広義の情報産業を中心とした「情報化」あるいは「情報産業化」した社会がもたらされるという。つまり、近年の情報技術により、人類が根本的に違う歴史段階に入る(入った)ことになる。

このような見解は、文明の発達過程を中心とした歴史の骨格構造に関する主張を伴っている。すなわち、歴史観を内包しているといえる。この歴史観は、情報という概念に深く関わるという特色を持っている。

さて、梅棹の所論において、社会の発展は以下のようなモデルにより捉えられている。社会は以前の段階の要素を包含して成立し、さらにその中のある種の要素を極度に発達させることによって、新しい段階に入るという過程をたどるというモデルである。したがって、「情報化社会というそれまでと全く異なる社会が到来する」というような単純な革命論ではなく、本来的には社会の連続性を否定するものではないのかもしれない。

しかし「革命」という語を用いれば、必然的に、それ以前の社会とそれ以後の社会との間の連続性よりも不連続性の方を強調することになる。社会が歴史的状況を受けながら持続して存在し、その上で変化するものという見方をせず、焦点をその根本的な変化に当てることにより、連続的な発達過程が相対的に軽視されることになる。

また、この考え方は情報技術の革新とその波及効果を強調する傾向にあるが、このことにより、現代社会の理解や将来予測において、社会変化をもたらすような先端技術などが外挿されてくるのを常に監視しつつづけることにつながり、さらに情報関連の専門家の労力もそれら新しい技術とうまく付き合うことに神経を注ぐことに費やされるという状況を生み出す思想的基盤になるのではなかろうか。

もう一つの問題は、以下のような点である。梅棹は言語・文字の発達や印刷技術についても「情報革命」という語を冠して位置付けてはいるが、過去の技術革新を相

対的に軽視しているのである。

過去における情報革命は、彼の考える文明の発展段階の区切りになるような大きな技術革新として描かれているものではない。いわば社会変化の点景にすぎないし、いずれにせよそれらは「現代の情報革命」の引立て役として描かれる図式になっている。

技術革新による影響の範囲や大きさを鑑みて、コンピュータや通信を核とする現代の情報技術の進展を高く評価すること自体は批判すべきではない。「現代は今までで最も情報による影響の強い社会である」という主張を否定することは困難である。

ただ、過去をそのような現代社会に至る道程としか見ない観点、つまり「社会が情報中心の新たな段階に突入していると仮定した上で、情報時代（情報化社会）までの発達史をたどる」という行き方は、現代社会の価値尺度に基づいて過去を論ずるアプローチであり、一種の進歩史観ないし勝利者史観といえる。現代社会の文脈から振り返って重要性の序列を付与するという視点をとることにより、過去の個別の時代それぞれの状況を十全に考慮した歴史叙述は困難になる。

このようなアプローチで、歴史を進歩史観により再構成すれば、過去の社会は「光輝に満ちた近代」に対する「暗黒の中世」のような不当な理解をされることになる。歴史を探究する行為自体も、単に立志伝のように、現在の成功を噛みしめるだけのものになり、それほどの重要性を持たないことになる。

ここでは梅棹の論を材料として検討したが、こうした観点は基本的にこのほかの論者の情報化社会論に関わる所論においても内在するものであり、そうした観点を共有する限りにおいては同様の批判が可能である。

情報化社会論が経済・教育政策を中心に広範囲の影響を与えていることは言うまでもない。また、現代における社会の変化を理解する際の一つのアプローチ方法を提供してくれるし、また情報化という概念をめぐる多様な学術分野により蓄積されつつある知見には情報史研究の立場から参照できるものは多いだろう。

しかし、以上で論じたように、一般に情報化社会論に内在する歴史認識（あるいは歴史観）は、「人類の社会は技術革新に伴う革命的な変化により、段階的に高次レベルへと進歩してきた」というものであり、歴史を理解するための準拠枠としては好ましくない因子を有している。

このような情報化社会論的な歴史観に対し、Stevens

の構想はどのようなものだろうか。

まず、彼のテーゼに戻ろう。彼は上述のように、古代から一貫して情報が社会に影響を与えてきたという主張を基盤とする。このことから、彼の求める情報史とは、情報化社会論の観点からの歴史像（不連続な変化を伴いながら、情報の重視される高次の社会へと進歩をとげてきた、というもの）とは異なるものとなる。

しかし、このテーゼ自体は、情報化社会論の歴史観のように積極的に歴史像を示すものではない。ただ、かわりに歴史認識を予め統御する因子も持たない。そして、むしろ歴史に対するアプローチを規定するものとして機能する点が重要な点であろう。

彼は、古代から情報が社会に影響を与えてつづけてきたことが明らかでなかった理由として、“今日まで、歴史的力としての情報の概念を扱うこと”が“十分に行われてこなかった”<sup>1)</sup>と述べている。つまり情報に対する意識が社会において確立されておらず、またそうした視点の歴史研究が存在しなかったために情報の役割が明確でなかったのだと指摘しているわけである。

こうして、このテーゼを立証するための歴史研究の必要性が生ずるが、そのためのアプローチ方法としては、時代ごとに、その時代の文脈でその時代の動機付けに基づいて人類が情報と関与してきた過程を眺めることが必要になる。とくに個々の時代を相対化し、それぞれの時代での主要な情報流通システムや情報の役割を同定することが必要である。こうした作業が進めば、情報史に関する精緻な理解が期待できる。つまり、テーゼの立証を目標にすることによって、アプローチの方向と質が規定されるという効用があるわけである。

以上から副次的にわかることは、彼の情報史構想は、学術的な歴史研究を本質的に伴う点である。そうになると、次の問題点は、研究のための方法論である。次節でこの点を論ずる。

#### D. Stevensの方法とその限界

Stevensは、情報史研究の必要性を説いただけでなく、その観点から評価できるいくつかの業績のレビューを行った。その際、包括的な情報史の叙述として評価できる既存の業績がないという問題意識から、彼自身の情報史（歴史像）の骨格構造および構成要素を示した。

骨格構造としては、以下の二つのアプローチの併用を行なっている。

a. 共時的な世界における情報や情報機器・情報活動



の影響を考える

b. 細かなトピック（主題）に関して通時的に探求する

a. に関しては、情報に関わる特定の分野に依存せず、また人類の歴史全体を視野に収めて新たに決定した時代区分を用い、各時代の共時的な特質、および革新的な手段・技術による総体の変化を略述することにより、情報史の全体像を示している。このことから判断すれば、Stevensの構想する歴史像の根幹は情報流通機構や情報システムの発達史ではなく、「文明の発達史」である。

時代区分は、情報流通機構に大きく影響を与えた出来事のうち、社会全体の変化につながったものを基準としている。先史時代・記録(writing)の時代・印刷時代・最近の段階（近現代）の四つに分けられており、斬新なものではないが多方面に通用するものである。最近の段階とは、産業革命以後のことで、印刷術の改良、電信・電話・ラジオ・テレビといった新しい通信手段の発達、エレクトロニクス技術の進展により、再区分される。

それぞれの時代については、変化の要因となった出来事（事物）についての捉え方・考え方を紹介し、その時代について考究・理解する際の留意点を挙げている。この記述方法によって、政治・経済や社会の形態による時代区分とは異なる歴史像を描き出している。

これに対して、b.のように個別の側面についても補っている。時代に関わらず一貫して見いだされる現象の中で、情報史研究の立場から重視すべき主題として、リテラシー、知識の組織化、情報の経済学、情報の提供に関わる機関、管理と自由の問題という五つを挙げ、個別に論じている。これらによって情報史を特徴づける諸側面（とStevensが考えるもの）を網羅すると同時に、情報史の進展を識別するための尺度を提供している。

情報史の構成要素については、レビュー論文であるために情報史を構成していく際に基盤となる重要文献を紹介する形式をとる。しかし、それらはいずれも「情報史のために書かれた」ものではない。彼はそうした重要文献から、Stevensの立場から重要だと考えられる点を選択し、抽出・引用・排列し、間接的に彼の情報史のイメージを表現している。

このようにStevensは、情報史研究に関する彼自身の枠組みを示し、レビューを通じて緊密(coherent)な歴史像を描出した。

しかし、レビュー誌という媒体の性格のためか、情報史研究のための枠組みを論文全体によって提示するかた

ちとなっており、理論的な議論は行なっていない。また情報史研究の進め方も具体的には示していない。

まず、研究方法論については、翻訳版の訳者解説<sup>1)</sup>でも指摘されているように、彼はEisensteinの仕事<sup>12)13)</sup>を一つの範例として認めているようであるが、実際にどのように情報史研究を推進すべきかという方法論・研究戦略の面については、明瞭な方向付けはしていない。

個別の調査手法については、Stevensのテキストからも様々な示唆を得ることができる。加えて一般的に歴史学において論じられている方法論を導入することにより、大方は解決がつけられそうである。たとえば、史料の集め方、整理方法、叙述の技法といった点である。

したがって、Stevensの論文で示された枠組みに忠実に沿ってパズル片を組合せるように個別の点を追究していくのならば、大きな方法論上の問題はない。問題が生じて、研究を累積しながら歴史学とも相互作用して解決を模索できよう。

しかし、情報史研究と称しても、包括的な叙述から各論、個別の出来事に関する詳論など、種々のレベルの研究がありうるし、それに応じて多様な調査方法がありうるだろう。とくに、学際的な研究領域を志向することにより、情報に関わる歴史研究の成果が実際に多様な形で現れてきたときに、どこまでを許容し、全体をどのように収束させるか、という問題が残る。

このように、情報史における主要な方法論上の問題は、歴史的事実をどう立証し、どう解釈するかという個別の調査方法のようなレベルにはない。歴史に関する実証主義は有効であるかといった歴史の概念そのものに及ぶ問題も含め、結局は歴史観の問題に帰着する。あるいはどのような問題意識を保持して対象の分析・探求を進め、どのように記述するべきかという問題である。さらに、「情報史」である以上、情報に対するアプローチの質が問われることにもなる。

彼の歴史観自体は、情報化社会論の歴史観を批判していることと、彼の挙げた情報史の各論（主題）とに現れている。しかし前者は根幹となる見解の表明という水準に留る。また後者は試案として提示されているものであって、情報に関する問題を広く網羅し組織化できるものかどうかを保証されないし、広範な問題を収束させる求心力を持っているかどうか不明である。

彼自身は、「本論は、この情報史の一般的な要素のいくつかについて、主として図書館学の視角から述べてきた<sup>1)</sup>」と視野・観点の限定性を認めている。組織的な情

報史研究を構想し、学際的な情報史研究領域を考えるなら、異なる観点の競合が避けられないから、歴史観といっても、多様な要因を位置付けるための一種の座標系の機能を持つ枠組みが望まれる。

こうした枠組みをどう形成していけばよいかという点が課題として残されており、以下ではこの問題を中心に検討を進める。

ここで、一度 Stevens を離れ、彼が視野に入れていない日本における情報史の試みを含め、視野・観点という面から既存の業績を批判的に評価する。最後に、その成果をもとにして、情報史研究における歴史観の構築方法を検討する。

### III. 情報史研究のグループ化

情報学の内部では、総じて歴史への関心が高まっている。たとえば Vickery らの著作以外にも、Shuman<sup>14)</sup>のように、テキストブックの序論において、新奇な情報関連技術を追って未来へ眼を向けるのではなく、図書館・情報サービスの専門職やその環境の歴史を語ることから始める例も出てきた。しかし、歴史をたどることが研究方法として意識されはじめていのかどうかは疑わしい。

一方、情報学の外部では、一見すると Stevens の求めに合致するような包括的な情報史の記述も見られるが、一般に情報に対する基本的考察を怠っているために厳密性に欠ける。

さて、こうした情報史に関わる既存の著作を見ていくと、いくつかのグループに分けられることがわかる。それらのグループは、情報史における種々の側面を表し、また情報史の全体像を構成する要素と考えることもできそうである。

以上の点を著作のグループごとに論じよう。

#### A. 情報システムの歴史

情報を扱うシステムの歴史は、範囲が明確で、取り組みやすい。引証しないが、例が豊富に存在する。コンピュータ（計算機）の歴史、あるいはオンライン検索システムの歴史がこの有力な事例である。この種の著作をグループ A と呼ぼう。

ここでは情報を扱うシステムを非常に広く考えたい。もちろん、第一には情報処理および情報伝達に関わる機器・道具がまず挙げられる。つぎに、具体的な形態をとらない方法・方式・手段というレベルの事柄も含められる。さらに、制度の変遷もこれらに密接に絡み、そこか

ら情報提供に携わる機関・組織にもつながる。こうしたことから、図書館史やデータベースによる情報提供機関の変遷をたどる歴史記述は、このグループに含めることができる。

これらを混合させることは当然ながら問題があろう。そこで、たとえば一般システム理論を念頭に置いたり、上田<sup>15)</sup>による情報メディアの階層化にならってレベル分けするのが有効であろう。

さて、Stevens はもともと、情報の問題を扱う歴史研究にとって図書館史では不足であるという認識から出発しているし、論文本体のレビューにおいても技術の系譜を情報史の大きなトピックとして取りあげてはいない。つまりこのグループに属する歴史記述は、単体では情報史の記述としては認められていない。ただ、情報史の特定の側面や環境要因に関する基礎的な理解を行なうためには当然、重要なものである。

実際には、このグループに含められる著作は、もともと情報史と銘打って構成されないことが多いだろう。また、技術的な事項の変遷だけで構成された歴史記述に関して「情報史」という名称を用いたものが現れたとしても、総じて著作の販売戦略上望ましい標題をつけているというにすぎないのではないか。

#### B. 情報学の歴史・情報思想史

情報学という「分野」の歴史として、古くは理論的基礎と絡めて論じた Shera らの著作<sup>16)</sup>が知られている。また、数十年におよぶレビュー誌の蓄積自体、結果的に情報学の研究・実務に関する歴史叙述となっていると捉えてもよからう。

情報学を標榜する共同体が安定しはじめた段階で、情報学とは何かといった議論にかわり、情報学の起源と発展の経過を述べるものも登場している。Herner<sup>17)</sup>は、情報流通過程や理論・実務に関する主要な業績（研究や考え方）の系譜をたどり、重要人物を挙げている。もっと大規模に雑誌の特集記事として構成されたものも見られる<sup>18)19)</sup>。Lilley と Trice<sup>20)</sup>はその種の単行書である。この著作は、研究成果および理論や概念の歴史であり、主要な力点は情報学研究者の業績の記録にある。日本においては、図書館・情報サービスに深く関わる事項を中心に編まれた年表<sup>21)</sup>や、科学技術文献およびドキュメンテーションの歴史の略述<sup>22)</sup>がある。

こうした、情報学の歩みを描く種類の著作をグループ B と呼んでおく。

これらはいずれも、専門分野としての系譜を記録したり、専門家のための基礎知識を提供する機能に重点がある。したがって、情報と人間の関係を包括的に述べた情報史ではなく、環境要因に目を向けながらも情報サービスあるいは情報学「に関する」歴史に留るものと判断できる。

これに対して、筆者が著した年表<sup>23)</sup>は、この段階を拡張する方向への模索を内包している。

その観点は項目の配置に現れている。この年表では、「情報サービス・情報源」「情報専門家・専門家組織」が中核となり、すぐ脇に「情報の理論や基礎研究の動向」および「情報管理の技術・技法」が配置され、さらにそのまわりに「哲学・関連科学分野」「基盤技術（いわゆる情報通信技術）」「一般社会の動向」が配置されている。

この構成は、情報に対する考え方・見識・方針といった要因の重要性を強く意識したものであるが、これに対し、もっと直截に情報に関する理論や考え方の系譜を中心に情報学の歴史を記述する著作が存在する。

まず、Machlup らの著作<sup>7)</sup>は情報に関する学術研究や理論に関する歴史記述を含んでいるが、とくに図書館学と情報学の関係について、歴史をたどる形式で記述する論文が掲載されている。これを受けて、情報学の状況を歴史の面から論ずるものが発表されている<sup>24)25)26)</sup>。

情報概念の歴史記述として、慶應義塾大学図書館・情報学科による組織的な研究<sup>27)</sup>やそれに先立つ上田ら<sup>15)</sup>の序論におけるまとめがある。これらは情報概念の変遷を示す資料や情報概念に関する研究史を網羅しており、情報思想史研究のための基本的材料と分析の観点を提供していることが情報史研究の立場からも評価できる。情報の定義だけでなく、一般人の情報に対する概念・意識をも扱っている点が特筆できる。

Ingwersen<sup>28)</sup>は、情報学全体の理論面での歴史をたどることにより、情報学における情報概念（あるいは情報現象に対する考え方）の変遷を描出している。これは情報学思想史の重要な範例といえる。なお、その上で彼は情報に関する新しい考え方を提案している。

これらは基本的に情報学という研究領域に付随したものであるが、単なる情報学の歴史という段階にとどまらず、それを拡張した「情報概念の歴史」という段階に達しているものと評価できる。これらの著作には、情報学という分野そのものに対する考え方の変遷に言及しているものもあるが、そのような部分も広い意味での情報概念の歴史として認めることができよう。

さて、筆者は以前、「情報思想史」というアイディアを示した<sup>29)</sup>。情報思想史を情報史の下位概念として位置付け、さらに下位概念として、情報学思想史を設定するという考えである。

ここでいう情報学思想史とは、情報学に範囲を絞り、その学説史と情報概念の変遷を合わせた歴史概念である。それに対して、情報思想史は“情報や知識に関係する多様な分野における考え方や、さらには一般社会の時代精神（または風潮）といったレベルや、生活習慣にあらわれた情報に対する態度”<sup>29)</sup>を扱うものとして提案したものである。つまり、情報思想史は、情報学に依存した歴史である情報学思想史を包含しながら、より広範な情報論を網羅する歴史概念となる。

学説や情報に関わるサービスに従事する者の意識もさることながら、そうしたサービスを受受する利用者（さらには情報のサービスと関わりなく情報を送受する場合も含めて）の情報に対する意識や考え方の発達に情報に対する要求を高めることは容易に想像できる。とくに現代において、情報に関する研究領域が発達して「情報に関する情報」が増大することが人間と情報の関わりに対して影響を与えることも容易に想像できる。実際に、人間は情報サービスや情報・通信機器の発達によって一方的に影響を受けるのではなく、伝達された事柄や情報活動の意義・効果について常に判断を加えることにより、相互作用を行なっているといえる。

こうした命題は検証が必要であるが、この検証も含め、情報史において情報に対する考え方の問題を導入することが情報思想史の役割である。それにより、単なる情報・通信機器の系譜にとどまらず、社会における人間と情報の間の多様かつ多重な関係に言及することができるようになり、情報史の精緻化に益するだろう。

そもそも、Stevens<sup>1)</sup>の構想の中で、情報概念に着目することが情報史にとって重要であると指摘されている。情報技術の発達とともに情報に対する意識が強まり、そのために截然と情報時代に入ったという印象を与えた側面もあるだろうし、ひとたび情報概念が発達すると、情報の社会における役割も飛躍的に増大するという側面もあるものと推測できる。また、過去において情報が常に社会の基本要因であったのなら、今日のように発達した情報概念がなくとも、情報に対する意識（の萌芽）はあったと考えられる。

以上論じたように、「情報に関するサービスや情報学という学術分野の歴史」では包括的な情報史とはなりえ

ないだろうが、情報概念や情報に対する考え方の歴史（情報思想史）として再構成すれば、情報史研究の一部門としての重要性を認めることができる。

つまり、情報という語の定義、情報に関する価値意識、情報に関する考え方といった要素のほか、情報学の種々の理論や方法論、さらに実務上の技術・考え方・技芸といった要素も、情報学思想史という形で総括した上で、情報概念の歴史（情報思想史）の一環として情報史に関連づけることができる。

### C. コミュニケーション史

情報史を考えるとときに避けて通られない重要な領域に、コミュニケーション史がある。この範疇に落ちる歴史概念をグループCと呼んでおく。コミュニケーション史の基盤はコミュニケーション研究領域と仮定できる。これは、たとえばLarry Barkerらのテキストブック<sup>30)</sup>やハンドブック<sup>31)</sup>を参照することにより、人間の間の相互作用に関する総合的な研究領域と規定できる。

コミュニケーション史と称しても、実際には通信技術・方法の変遷に主眼をおいたものもあるが、これはグループAに帰属させよう。グループCは、そうした技術・方法（つまりコミュニケーション・メディア）によるコミュニケーション活動への影響を中心とするものである。たとえば、Raymond Williams<sup>32)</sup>は、人間のコミュニケーションに関わる基本問題を描く中で、コミュニケーションの手段・方法が人間間のコミュニケーション活動に与えた影響を概観している。また、江藤ら<sup>33)</sup>は、以上と同様の要因も踏まえながら、この図書の編集が行われた当時の政治・国際関係や構造主義思想などの影響を受け、技術よりも社会的「行動」としてのコミュニケーションとその波及効果に焦点を当てている。

独自の蓄積があるのは、Harold Innis および Marshall McLuhan らに始まる系統である<sup>34)</sup>。そこでは、文明の発達過程におけるコミュニケーションの技術・方法・装置の役割が主要なテーマである。コミュニケーションに関する現代的問題を論じる方法論として歴史に言及しているともいえる。新しい方向性として、Heyer<sup>35)</sup>は、Innis および McLuhan の仕事を批判的に継承し、科学史と哲学史を含み込むようなコミュニケーション史に関する観点を探求している。

さて、このグループに帰属する著作としては、物語的なものが古くから見られるが、新しい動向を反映した包括的な叙史的著作も現れている<sup>36)</sup>。章立てはコミュニ

ケーションの媒体・道具・方法によって構成されているものの、Innis, McLuhan, Eisenstein, Darnton, Ong といった著名な研究者の著作のダイジェストを含むオムニバスであり、コミュニケーション史研究の成果を概観できる。

コミュニケーション史および情報史の概念の基盤となるコミュニケーション研究と情報学は、双方とも情報の問題に関与し、関心事項の範囲も近い。図書館情報学の文脈にあるStevensにおいても、このコミュニケーション史の影響は大きい。そもそも、情報学という分野自体が、コミュニケーション研究と深く結びついており、現在は相互作用が少ないものの<sup>37)</sup>、融合が模索されている。

コミュニケーション史は、蓄積もあり、一見するとStevensやVickeryの求めるものにも合うように思われる。しかも、コミュニケーションの問題は社会的活動の一環（というよりも中枢）であるため、社会史の文脈に位置付けやすい。

しかし、コミュニケーション研究においては、必ずしも情報だけが主要な関心事項ではないのではなかろうか。基本的に人間および人間間・集団間の相互作用を中心に扱うために、(情報学において強調されるような)知識・情報の蓄積・伝達・継承という作用が、往々にして相互作用の契機または効果という程度に扱われてしまう懸念がある（ただしHeyer<sup>35)</sup>は、その点で例外となるかもしれない）。そうした点で、コミュニケーション史の一般的な観点到、不満足が残る。

さらに、C. Marvin<sup>38)</sup>が指摘するように、コミュニケーション史という分野自体が安定していないことが挙げられる。同氏は、コミュニケーション史における近年のめばしい成果はむしろコミュニケーション研究以外から現れており、ましてコミュニケーション分野から一般の歴史研究への影響は弱いと指摘している。

こうしたことから、コミュニケーション史単体に依拠して情報史を構想することは避けた方がよいだろう。情報と密接に絡む問題であるにしても、人間の間の相互作用という問題は、むしろ心理学・社会学と連結し、別種の視座を提供する面があり、その側面を強調した歴史概念を維持する方がむしろ有用である。

### D. 情報学以外での試み

日本においては1970年代初頭から情報史に関わる試みが見られ<sup>39)40)3)</sup>、近年になって、歴史学の研究者を巻き

込みながら増加している<sup>41)42)43)44)45)</sup>。この種の著作をグループDと呼ぶことにする。情報学と切り離された動向ではあるが、こうした試みがいくつも公刊されていることは評価できる。

総じて、情報という概念(または語)を用いて既存の歴史像を書き直し、新たなイメージを展開するという企てである。とはいえ、情報という語を用いてはいても、むしろ異種の社会間の交流に焦点があり、コミュニケーション史の性格が強いものもある<sup>45)</sup>。このことは、情報史と謳っていない著作<sup>46)</sup>において、ごく似通った側面が見られることから指摘できる。ただ、諜報・噂・報道といった事柄に留らず、情報を交通と絡めて論ずる傾向が見られる<sup>42)44)</sup>のは興味深い。

最近では、歴史学研究会という学会組織が主体となり、日本史研究の中に情報という概念を積極的に取り込む試みを行なっている。たとえば言論・報道・文書の生成と継承・商行為・文化交流などの諸事象を情報に関わる問題としてとらえ直すことが行われており<sup>43)</sup>、江戸時代の社会がそれまでより「情報化」の進んだ社会として再構成されている<sup>44)</sup>。

これらに共通しているのは、歴史の問題の中に、情報・コミュニケーションに関わる局面を見だし始めたことであり、歴史の駆動要因として情報を捉えなおすというStevensの発想にも通ずる。

しかし、これらはむしろ「情報に関わる事項に焦点をあてて構成された一般的な歴史」という性格になっている。情報の概念の多様性・多面性や、情報に関わる現象の特質を十分に考慮していない。そのため、通常の歴史学のアプローチで歴史記述を行い、その際のアクセントとして情報に関わる局面にハイライトをあてているという様相を呈している。そのためにグループAやCの観点から重視されるような事物が断片的に網羅されるにとどまる。その結果、情報に関わる観点が拡散している。

その中で西岡<sup>47)</sup>は、網羅性の面で不十分ながらも情報概念に関するレビューを行なっており、その中でたとえばコミュニケーションの問題と情報の問題を区別すべきだと指摘したり、人間の思考の枠組みと情報の関連を重視するといった進展を見せている。

情報の問題を比較的幅広く捉えたのが謝<sup>39)</sup>である。もともと著者の「西洋史に重心を置かない世界史」の構想を実現する歴史叙述として企画されているとのことで、情報という語はそうした企画実現の際に、特徴付けのために導入されているにすぎない。そのため、情報概

念に関する基本的考察を十分に行なっている形跡もなく、将来の情報管理過程に関して指針を与えることを目標としながらも、結局は歴史の記述の際に種々の事柄を順に情報ということばで読みかえているに留る。ただ、情報流通过程や、情報の処理・伝達に関わる機器に留らず、「人類の蓄積している情報遺産」という点を重視していることは、後述のグループEに照して興味深い。

これらに対して、編集工学研究所(松岡正剛ら)<sup>48)</sup>は、情報の問題の多様性・多面性を考慮した年表を作成している。これも本来は、人類の一般史に関わるあらゆる事項を網羅した包括的な年表という企画として始まったようだが、最終的には情報と歴史の関わり方の多面性を考慮した上で、人類の歴史の全体像を示し、その細部を情報に関わる問題に重心をおいて再構成したという年表となっている。

この多様性とは、情報に関わる機器・媒体や方法・制度といったものの多様性に留らず、情報現象が人間や社会に対して作用する相やレベルの多様性を含む。彼らが明示的または暗黙に網羅している情報に関する側面として、以下のものが識別できる。

- a. 情報技術は文明を変化させる
- b. 情報は社会の諸作用の動因である
- c. 情報技術を支配したり情報流通を統制する組織が社会全体を統制することがある
- d. 人類は文献や口承によって、経験・思想を情報として蓄積し伝承してきた
- e. 歴史という構成物そのものが重要な「情報源」でもある

このような把握のもとで、彼らは、年表という編集著作物を通じて新しい歴史像を浮び上がらせるという効果を期待しているようだ。情報技術やコミュニケーション活動の時代ごとの特質や変化を略述する図式や文章を挿入してはいるが、どちらかといえばそれも年表を見るためのヒントと理解すべきであろう。

このように論述として構成された著作ではないことから当然かもしれないが、彼らの著作は分析的な記述を欠いている点に問題を指摘できる。情報の概念に関して、包括的であるが、分析的な理解が現れていない。そのため、教養を得たり、アイディアを読み取るには適しているが、情報に関する学術研究や実務にも役立つ研究業績としては評価できない。情報史研究につなげるには、情報の多面性を包括的に視野に入れた上で、それら分析的に組織化していく観点を導入すべきだし、さらに個別

の研究の累積を引き起こす要因が必要である。

ただし、これは、「情報学（またはその類縁の研究領域）に所属する研究者の手によるものならばよい」という意味ではない。

たとえば、テキストブックの枠で情報史を扱った小山田の『情報学・情報史』<sup>49)</sup>は、情報に関わる技術・手段を中心に多様な歴史的事項を取り挙げ、情報の管理・提供・利用に関する基本問題を論じている。しかし、読者のための参考文献どころか、引用文献や著者が参考にした文献すらも記載されていない。「情報学」という語で示している対象も不明で、背景とした学術研究とのつながりがわからない。教養書としてはともかく、こうした点で、情報学という学術分野のためのテキストブックとしては不十分といえよう。

また、多様な資料（おそらく二次的史料）を用いて著述がなされていると推定されるが、文献への言及がなく、また背景となる著者の考え方も不明なため、既存の文献を単に組合せて歴史像を合成したものという印象を与えてしまう。

一個の著作として構成されている以上、情報史（というより情報）を探求する上での枠組みまたは何らかの考え方があるだろうから、既存の考え方の吟味・評価を行ないながら著者の考えを明示すべきである。それによって、描出した歴史像に一貫性が与えられるだろうし、もし仮に著者の考え方に批判すべき点や欠落した視点などがあれば、そこを補う後続の研究によってさらに情報史研究が進展するだろう。

情報史研究領域が成立していない現状では、テキストブック的な著作にしても、そうした後続の研究に資する要素が望まれる。

情報学関連分野での早期の試みとしては、鈴木徳三による図書館学のテキストブック<sup>40)</sup>がある。鈴木は、オーソドックスな図書館学に留らず、教育メディアという用語を鍵として用い、情報の伝達・記録・蓄積・組織化・処理・利用を論じている。そしてこうした過程に関連する事柄を網羅した年表を構成し、本文でも情報を中心にした人類の歴史の叙述を試みている。鈴木の場合は情報に関する一定の考え方を示してはいるが、やはり資料や論拠が十分明示されておらず、小山田に対する批判と同様のことが指摘できる。

以上概観した試みは、一見すると Stevens の求める情報史の枠に適合するように見えるが、情報に関する考え方の分析的な吟味を行っていないか、または不十分で

あることが指摘できる。情報に対する総合的かつ分析的な探求を基盤とし、自らの観点を明確化してから取り組まない限り、こうした試みを累積しても、参考資料としては役立つにせよ、情報史研究を進展させる業績としては評価できない。

換言すれば、情報の問題を探求する一環として情報史を論ずる態度が必要である。またそのような態度をとることができても、情報に対する包括的かつ厳密な理解を示さない限りは有効性を持たない。

歴史学の専門家に関しては、Stevens の情報史の概念を理解し、歴史学の一つのトピックの一つに情報を加えるといっても「中世文化史」「中世国際関係史」といった歴史学内部の部門の列に「中世情報史」を設定するというような簡単なアプローチをとらないよう望みたい。そして情報の問題の複雑さを認識し、その機能を分析的に捉えることの必要性を理解して、図書館学・情報学を軸とする情報研究の系譜とを視野に入れ、情報に関する学際的な研究の流れに参加することを提言したい。

一方、以上の批判は、これら試みを否定するものではない。これらの試み単体で、包括的な情報史と認めることはできないということにすぎない。こうした情報学外部の観点が情報史に対しても寄与することを認める必要がある。つまり、このグループの著作には、情報流通のための機器・人間活動・社会機構といったあらゆる情報関連の事物の機能を、上位階層の社会全体の構造の中の局面として捉える観点が見いだされる。

情報学という領域の観点から社会全体を眺めるという視角をとる限りは、社会史の諸問題を包括的に視野に収めることに困難が伴う。それに対して、社会全体を把握・理解しようとする観点から情報の問題を眺める視角をとると、情報の問題に対する視野が拡散することに注意を払う必要があるが、そのかわりに広い文脈の中で情報を考える観点がえられる。

#### E. 客観的な意味での知識の歴史

以上では、既存の著作から導出されたグループを扱ってきたが、ここで新たな枠を提案する。伝達内容・認識の内容という種類の現象に焦点をおいた歴史概念である。実際にそのような歴史概念に関わる著作が識別されているわけではなく、実際には空集合となるが、この観点の歴史研究を仮にグループ E としておく。

グループ D に含めた著作で示されたように<sup>39)48)</sup>、人間に知られている事柄や人間が受ける伝達内容も情報史の

重要な因子である。とくに社会史という広い文脈で情報の問題をとらえるとき、情報の伝達や蓄積の方法のみならず、軍事情報や流言といったかたちで実際に伝えられた内容こそが社会の動因である局面も多いだろう。

情報学においても、「情報のストックとフロー」を明らかにしようとしたり、社会において伝達される「情報内容」とか、文献やデータベース等を通じて蓄積・継承されてきた社会の「情報遺産」を取り扱おうと試みてきた面がある。これらの語法が妥当かどうかは議論の余地があるが、無視することはできない傾向である。

この枠を設定する背景には、Karl Popper の提唱した objective knowledge という概念がある。情報学において、この概念に注目する論者があり、情報学においては初めての哲学的議論が繰り広げられた<sup>50)</sup>。論争は現象学や認知科学の影響を受けた、より精緻な情報論の勃興の中で自然消滅しつつあるが、再解釈により顧みるべき価値のある概念であると筆者は考える。

「図書やデータベースの中に、誰にでも明白で到達でき、解釈の影響を受けない実在として内在している情報（または知識、事実、知恵等）」を想定したいためにこの語を使用するのは、現代の視点からは批判せざるをえない。しかし、ここではまず、物事を認識する過程によって（あるいは人間の認知機構と情報メディアとの相互作用によって）、個人の「内部」に出来上がる心理的実体（構造体）を考えたい。これを「情報」と呼んでも構わないが、筆者の見解では、少なくともこの心理的実体を差すために objective knowledge という語を用いることが適当である。

こうした心理的実体は認知機構の一側面であり、その実在性は個人の認知機構に基本的に依存する（つまり人間から完全に独立した実在として考えることはできない）。しかし、「どのように知ったのか(how)」という認知過程の問題と別に、「何を知ったのか(what)」という認知の成果を考えることはでき、両者とも認知機構の重要な側面であると考えられる。ここから、グループCの観点とは別にグループEを設定する根拠が生ずる。

そうした心理的実体がどのようにして生ずるかは情報学基礎研究の担当すべき課題であろう。情報史研究では、人類にとって物質的状況以外に、そうした実体で構成される知的状況があり、それが時間の推移により変化することに注目すべきことではなからうか。

ここで知的状況と考えるものは、完全な意味で個人間で共有された公的な領域ではなく、むしろ個人の意識

（認知的世界）の単純な集合である。しかし、その知的状況においては、人間たちはこうした心理的実体を他人から継承したと感じたり、ある集団内で共有していると確信したり、または「送り手」が首尾よく伝えたと感じ、さらにそうしたことが幸福な誤解ではないことがありうる。あるいは、人間たちは共有したが、情報メディアの物理的形式のどこか（裏側か内側か）に人類共通の知識を想定したがる性質が一般にあると考えられないだろうか。また、情報メディアの構造や認知機構の仕組みの共通性ゆえに、少なくともある種類のパターンの一部分ないしある側面の個人間での共有も達成されているといえる。こうしたことから、この知的状況を独立した個体の意識世界の単なる羅列ではなく、集団・共同体のレベルでの「全体」を考えることができる。

ここでは個人間での認識の共有が完全にはできないという立場をとるから、こうした知的状況を完全に記述できるとは考えられないが、その変化を記述しようと試みることは、情報サービスや情報活動の効果を描くという目的のみを考えても、有用なはずである。

さて、グループEの観点到該当するものは、科学史と哲学史・思想史の領域に含まれるかもしれない。文学史や美術史・音楽史の著述もここに含めてよいかもしれない。また、むしろ一般の歴史研究において、この種の歴史概念において重要な要素が潜んでいそうである。たとえば、政治家の言動や民衆の意識といった要因である。

しかし、こうした個別の確立した歴史概念を情報史の中に導入するには、それらの対象を情報学の立場から再解釈し、位置付けるといった準備作業が必要である。さらにそうした現象を捉える方法論を検討すべきである。

方法論の検討の際に参考になるものとしては、科学哲学と科学社会学の中間概念として Fuller<sup>51)</sup> が提唱した social epistemology があげられる。また、Foucault により構造主義運動の文脈で思想史に代るものとして模索された「知の考古学」の発想<sup>52)</sup>も示唆的である。

#### F. 情報史の五つの側面と Stevens の枠組み

五つのグループを識別した。各々のグループの著作とも、単体では情報史を構成するには不足であるが、いずれも情報史にとって重要な観点を示している。あるいは、情報史の主要な「側面」を反映したものと考えることができそうである。そこで、これを再構成してみよう。

A: 情報を扱うシステム（道具・方法・技術・機関）  
に注目する観点から見た側面

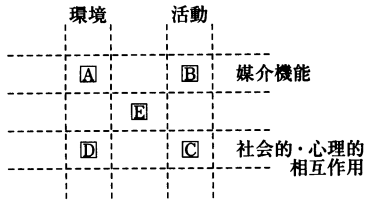


図1 情報史のグループの相互関係

- B: 情報に関する考え方・概念に注目する観点から見た側面
- C: 人間や集団の相互作用に注目する観点から見た側面
- D: 人類社会全体のレベルで情報の問題を捉える観点から見た側面
- E: われわれが蓄積・継承してきた知識に注目する観点から見た側面

これら五つの枠は、概略的な区分であるが、それゆえに情報史に関わる主要な側面を網羅したものとなっているものと思われる。

これら五つは、互に直接の因果関係を有する要因というものではないが、論理的な関係はあろう。A～Eを配置し、主要な関係を概略的に表したものが図1である。

図1では、各側面の概念または特質を表している。まずAおよびBの側面は、いずれも情報学という学術分野（または情報サービスに関する機能・職能）と密接に関連する。CとDは、むしろ社会的・心理的な諸問題全体に範囲が広がっている。一方、今度はBとCにおいて情報に関わる人間活動が主であるのに対し、AとDではそうした活動の環境要因である。残るEの側面の主要素は、上述のように、ここでは物体・物質ではなく人間活動そのものでもないかと仮定しているから、A～Dすべてに関与し、それらすべてに取り囲まれて浮び上がる現象として位置付けた。

この概念図は粗略なものだが、「これら諸側面を分離して取りあげるのではなく、各々の背景となる観点をこうした相互関係をもとに連合させるべきである」という筆者の主張を反映している。

さてこうして情報史の諸側面を同定すると、Stevensの観点の特徴が明らかになる。

彼が情報史のテーマ（トピック）として列挙したものは、情報に関わる機関および情報機関等で実践される情報の組織化という問題と、社会史の文脈における情報の問題とに二分できる。後者は、情報技術の発展そのものよりもその利用機会の普及や統制といったトピックを強

調している点に現れている。

これは、情報の概念を導入することにより、図書館・図書目録および図書館を取り巻く社会環境（政治・経済・社会構造）を見るという図書館員の観点を拡張したものと認められ、情報の専門家と一般社会との接点に焦点をあてた観点を反映しているものと判断できる。彼の描く歴史像は、これゆえに、情報学の世界だけに眼を落す歴史像ではなく、一般社会の様々な事象を扱う拡散した歴史像でもなく、緊密さ（coherence）を有するものになっている。

一方、一見すると、多面性という点では、経営情報の問題とか、学術情報メディアや学術情報メディアを通じた科学コミュニケーションに関わる問題が大きく扱われないし、政治・経済の側面での人間活動が中心となっていて娯楽を含む文化的活動が扱われていない。

しかし文化や伝達されたり蓄積される知識について言及しない理由は、説明変数に対する被説明変数というような感覚で捉えているためかもしれない。また、話題を拡散させないために経営や学術の文脈に言及しなかっただけかもしれない。実際に扱っている歴史的要因としては、情報に関わる技術、情報概念および情報に関する専門家の考え方、コミュニケーション活動、社会の一般動向といった多様なものを網羅している。その意味では、彼の観点が偏っていると単純に非難することはできない。

ただ、ここで強調したいのは、今後、情報史研究領域というものが成立し、Stevensが言及しなかった要因を導入するようになれば、彼の歴史像の持つ長所である緊密さが損われる可能性がある点である。個別の研究者ごとに立場は異なるだろうし、組織的な情報史研究を学際レベルで進めれば、多様な観点が表明され、また混淆することになるだろう。個別の調整にも困難が予想される。そうした状況において多様な要因を包含した情報史をまとめようとすれば、散漫な歴史像しか描けないだろう。

彼は、“the history of information” という定冠詞付きの語法をほぼ一貫して用いており、慣用的な用法とはいえ、統一的な（共有された）歴史像や情報史研究領域を暗に想定していると判断できる。このことから考えれば、彼が取りあげていない要因を増やしていく際に、緊密性を維持することは基本要件である。

しかし、多様な観点の研究が入り交じったときには、Stevensの論文の構成自体によって暗示されている枠組



みに依存するだけでは、弱体である。彼の歴史像は上記のように、多元的ではあるが多面的ではない。多様な観点の相克に対処するためには、上記の A～E という異なる側面を網羅しながら、それらを関連づけるような、高次レベルの枠組みが有効である。こうした枠組みを構築することにより、相異なる観点から作られた歴史叙述を接合する基盤を提供できる。

さて、そのような枠組みをどのように構築するかという問題は、情報史研究領域の形成のための戦略に関わる。そこで次章では、歴史観の問題を含め、情報史研究を進展させるための方策を考える。

#### IV. 情報史研究のための戦略

##### A. 北川敏男の情報史観の概念

日本における情報史関連の業績の中で、情報研究の専門家という立場から情報史研究を構想した北川<sup>3)</sup>を検討しよう。

北川は、文明の歴史を分析し叙述する際に、「情報科学」の考え方を適用することを考えついた。彼は日本独自の「情報科学」の概念を確立し、普及させることに貢献したが、全般に彼の情報科学が専ら自然や社会の模様に向けられてきたのに対し、今度は人類の文明の発達史を情報科学の枠組みから理解することを企図したわけである。そして彼の構想していた情報科学が自然および社会の諸事象をつなげる媒介として機能することと、彼が提唱していた情報論理空間（情報に関わる一般概念を排列した枠組み）が社会・経済に関する歴史の分析に有効であることを示そうとした。

歴史研究の方法論に言及し、理念型 (Ideentype) という概念を中心に歴史的現象の理解や記述に関する議論を展開した。彼は、文明（人類）の歴史の理解・記述に際して、情報科学の枠組みに基づいて立てる仮説の集合を「情報史観」と称し、この考え方をもとに、歴史に対する新しいアプローチを定立しようと試みた。

実際の記述は、人類の文明の発達過程における種々の要因を彼の情報科学の基本概念（たとえば、指令、評価、営存といった概念）で言い換えることが基本となっている。それら基本概念の相互関係は、彼の情報科学の枠組み（情報論理空間）により規定されているし、数理的なものを含む種々の理論が背景にある。この対応づけにより、歴史的現象における因果関係や方向性に関する仮説を立てる際にそれらの基盤を利用することができ、そのために従来の歴史研究で解釈できなかった課題に解釈を

与えると彼は主張して結んでいる。

こうした言い換えは、各時代の情報処理・伝達・提供システムおよびサービスに留るものではなく、あらゆるレベルの人間活動や組織の行動に及び、さらに自然環境との関わりまで同様の枠組みで説明しようと試みられている。すなわち、歴史に関わるあらゆるレベルの事象を彼の情報科学の枠組みから説明しようとしているわけである。

このように、北川の考えた情報史研究とは、情報に関する科学のものの見方を歴史世界に適用したものである。したがって、情報に関する研究成果の全体が情報史研究のために貢献しうる。彼のアイディアは、情報史に関わる戦略を検討する際に、示唆深い。

歴史観の問題は、もとより歴史研究の根幹に位置するが、歴史観は、歴史研究から与えられるイメージと歴史に与える（投影する）イメージという二つの意味合いで捉えることができる。

後者の意味合いで捉えて歴史観を強調すると、イデオロギーを一方向的に投影して恣意的に歴史を解釈するものとの誤解を受けるだろう。思想の表明の手段として歴史記述を用いる目的ならともかく、学術的・組織的な情報史研究においては望ましくない。

これに対して、北川敏男の情報史観とは、動的な要因が付随した歴史像である。つまり、情報に関する理論的枠組みから導出される仮説の集合体であり、史料（情報源）との相互作用により検証にさらされる。つまり、歴史に投影するイメージである一方で、歴史研究の過程で修正されるため、歴史研究から生ずるイメージでもある。

北川と別に、情報史観という語を用いてきた論者として、吉田民人<sup>53)54)</sup>がいる。彼の場合は、この語を「情報概念を中心にして自然と社会の空間的要因と時間的要因とを再解釈することによって構成された世界観（宇宙論）」という意味で用いていると推定できる。歴史研究との連関はとくに意図していないようであるが、目的が異なるだけのことで、情報概念を中心に歴史を再構成するという着想は同様である。この用語法を参考にすれば、歴史観とは「情報学の枠組みに基づく情報史研究に固有の世界観」「時空間に関するモデル」であり、歴史に引き戻せば「歴史に関するモデル」と言い換えることができ、より明確化する。

さて、情報学にとっては、北川の唱えてきた情報科学の枠組みをどう扱うべきかという問題が別にあるが、こ

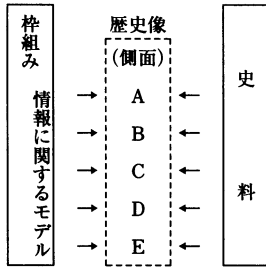


図2 情報史の枠組み・歴史像・史料の相関

れは情報に関する学術研究のあり方という大きな課題の一部であり、基礎研究の役割である。

そこで、この北川敏男の考えを単純に情報学に引き寄せて再解釈すると、情報史とは情報学の理論的枠組みを適時的に適用することであり、情報学という分野全体を以て歴史の探求に望むという大掛かりなプログラムと考えることができる。つまり、ここでの歴史観とは、歴史に対する予断的なイメージではなく、学術研究の過程を背景とした動的な歴史像である。

最終的に、情報史のための歴史観とは「情報学の考え方(枠組み)を史料に投影し、フィードバックを受けて理解を変化させていくという相互作用の過程(情報史研究)を通じて得られる歴史像」と定義づけられる。

図2はこの考え方を図式化したものである。ここに示された考え方は、以下のとおりである。情報史研究の基盤となる枠組みは、情報学全体の枠組みとしても通用するものが望ましく、さらには情報に関するモデルを中核とすべきである。この枠組みと種々の史料との相互作用の過程で得られる歴史像が情報史研究における歴史観である。相互作用は情報史研究が続くかぎり生じ続ける性格のものだから、この歴史像は絶えず変化する動的な像である。また、IIIのFで示した五つの側面は、情報史研究が網羅すべき五つの観点を反映しているものだが、こうして得られる歴史像の五つの側面として認めることができるだろう。

I章で情報学の文脈で既成の歴史観が見当たらないという問題意識を示したが、このように北川のアイディアを導入すれば、情報学の枠組み自体が情報史研究に寄与することになり、そのように即断できなくなる。そして、こうした着想に基づいて歴史観の問題を考えれば、情報学の研究全体が情報史に活用され、II章でまとめた情報史研究の意義を十全に発揮するものと期待できる。

こうした考えを背景に、情報史のための歴史観の問題と情報学全体における枠組みの問題とどのように関連づ

けるか、その手順について次節で論ずる。

## B. 情報史の枠組みの形成と個別の研究

前節のような考え方に立てば、情報史のための歴史観を追究する際、情報の発生・伝達・利用に関して情報学(を始めとした情報関連の研究領域)において提案されている全てのモデルや考え方が検討の対象になりうる。たとえば、情報学における情報流通過程のモデル<sup>15)</sup>のほか、情報概念に関する探求を受け、現象学・記号論・認知科学の影響とその反動を収束させることにより形成されつつある情報学独自の考え方<sup>28)55)56)</sup>、また上述の吉田の考え方等が挙げられる。

北川敏男は、自らの理論を汎化して用いようとしたが、実際には情報に対する考え方が情報の問題に関わる研究者の間で共通化しているわけではなく、また異なるレベルの議論が調整されていない現状である。

このように、情報学は既成の単一の考え方に則って情報史研究を進められる状況ではない。複数の考え方の比較・分析等の基礎的な議論の進行を促しながら連携しつつ、並行して情報史研究を進めることが必要になる。

こうした基礎研究は、通常は一般モデルを志向するだろうが、情報に関する一般モデルはもちろん直接歴史に関する知見を与えてはくれない。北川の構想にならえば、まず、歴史研究における分析・記述のための概念装置として機能し、つぎに歴史に投影する仮説の源となる。つまり、種々の史料の集積の中から、情報史に大きく関わる要因を同定し、序列をつけ、またそれぞれの要因を記述したり、相互の因果関係・相関についての仮説を立てる際の準拠枠になるだろう。こうした仮説の集合から、新たな歴史像(つまり情報史のための歴史観)が得られることになる。

さらに、異なる観点の調整を図りながら進行させるべきだという要請がある。上で論じたように、既存の情報史研究の問題点の多くは、観点の限定という問題に帰着している。したがって、情報史研究において基本的な枠組みとして適切なものは、より多くの側面・レベルを網羅し、関連づけた多面的なものである。Stevensの枠組みも種々のレベルの要因を網羅してはいるから、それを明確化・定式化して出発点とする戦術も考えられるが、情報に関する基礎理論に一度立ち返る方が得策だろう。

なお、上記の五つの側面のリストは、もっと細分化した方がよい。現段階の概略的な分け方も、異種の著作や研究を識別する手段としては役立つだろうが、研究を進

めれば情報史が上記の五つの側面だけでは表しきれないことが明らかになろう。そこで、とくに情報に関する種々のモデルと関連づけるためにも、図1の再検討も含め、精緻化が必要である。

こうしたことを考慮しながら、情報に関する一般的な基礎理論から、情報史に関する枠組みを導出するという作業が望まれる。

一方、連携しながら並行して進めるべきだというのは、情報学の枠組みを情報史に適用するといっても、基礎的議論の成果を待つ必要はないという意味である。一般モデルにおける各々の考え方が個別に歴史研究に適用されると、歴史の説明という場で比較・対照できるようになり、そこで逆に基礎研究における争点を明確化できる場合があるだろう。つまり、歴史研究への応用を急ぐことにより、基礎研究自体にも逆に寄与することが期待できるわけである。最終的には情報学全体の統一的な枠組みと合一するにしても、基礎研究の動向を見ながら、暫定的に情報史研究に固有の枠組みを保持する戦術をとらないと、なかなか出発できない。

緊密な情報史研究領域を維持するには、歴史研究を主導するような枠組みをつねに共有していることが有効である。しかし、研究を過剰に拘束するような強制力を持たせるのではなく、個別の情報史研究の枠組みが全体のものとして著しく不整合である場合、場合によっては全体を修正する可能性も考慮すべきである。さらに、情報史研究が「歴史的方法による情報についての研究」というレベルに達すれば、特定の基礎理論や情報学全体に対しても疑義を呈する権利があるだろう。

個別の研究においては情報に対する各自の見解や枠組みを明確に保ちながら自由に歴史研究を行なえばよい。歴史研究領域という共通の場に発表することによって、個別の枠組みの相互、また個別の枠組みと全体の枠組みとの間で相互作用が引き起こされる。それを繰り返す中で、徐々にコンセンサスが得られればよいのではない。

枠組み・歴史観の形成というものは、基本的にはこのように恣意的でない形で進めるべきだと筆者は考える。

### C. 個別研究のための指針

さて、具体的にはどのように情報史研究を展開していけばよいのだろうか。

前述のとおり、Stevensは歴史学研究者であるEisensteinの仕事<sup>12)13)</sup>を範例として挙げている。

Eisensteinは、西欧史における一つの作用因としてGutenbergによる印刷術の確立に着目し、従来から指摘されてきたそのインパクトの実相を丹念に検証し、印刷術をめぐる動きを中心に当時の西欧社会の全体像を描出している。技術・技法のレベルはもとより、印刷・出版に関わる業者、出版物、その背景となる宗教や学術の活動、知識内容、民衆の生活など、多様なレベルの要因を分析し、その因果関係を同定している。

歴史学における研究方法に関しても熟慮を重ねながら記述を進めているところからも伺われるとおり、一般の歴史学の文脈で構成された著作であるが、ここで描き出された歴史像から、情報およびコミュニケーションに関わる動きや問題状況が明晰に浮び上がるものとなっている。

このような研究を全時代・全地域にわたって続けることは容易ではないだろう。年代が下るにつれて要因が多様化し、また要因間の相互関係が複雑化することが明白である。そのために問題や対象を細分化して組織的に取り組まざるをえない。しかし、問題意識の共有を図って取り組んでも、異種の文脈の研究者が集合する場合には困難であろう。Eisensteinの仕事は、調査方法や研究の質という面で共通の目標となりうるかもしれないが、上述のように個別の研究をさらに統合するための枠組みを共有し、それを意識して研究を進行させることも重要であろう。

さて、このほかに、情報史に関係しない著作や一般の歴史学方法論も広範に参照することも有効だろうが、ここで情報史の類縁と見なすことのできる科学史を見てみよう。

科学史の性格<sup>57)</sup>を見ると、歴史学の各論としての性格よりも別の立場からの要求により特徴づけられている点や、物体史料を扱う研究もある一方で知識・理論といった捉え難い現象に関与しているといった点で、情報史に近い。歴史よりも個別の科学分野に関する専門的な理解が要求されるといった点や、一線から退いた科学者による授業を主体とした状況から、独立した研究分野として科学史を成立させようとしてきた努力なども情報史にとって参考になる。

そうした中で、村上陽一郎<sup>58)59)</sup>のように、パラダイム論を受け、最近の科学哲学と連動する動きがある。

村上は、啓蒙思想以降の科学観による教育を受け、現代の科学・技術の隆盛を目の当たりにしている立場から科学史を解釈することの危険性を強調する。とくに進歩

や真理への接近という観念や、後世において有効とされるようになった理論を主役に描いてしまうという「勝利者史観」を戒め、過去を現代と切り離して相対化して捉えるべきだと論じ、時代ごとの知的状況全体を把握することにより叙述を行なうことを求めている。

さらに、単に過去の出来事の系譜ではなく、知識の問題に関与することが問題を困難にする。彼は、今日の人間（科学史研究者も含めて）の知識体系の中に科学史における過去の理論や観点が重層的に内包されていることを考慮して研究を進めるべきだと指摘し、文化人類学の方法論に示唆を見いだしている。

情報史において、こうした問題に類するものはないだろうか。

一つは、情報史研究はどうしても情報化社会論的な歴史観の影響を受けたり、あるいは少なくとも技術の進展に眼を奪われるということがあるだろう。また、情報概念および知的活動・知的状況や、またそれらに対する過去の人間たちの意識・認識といった側面については、現代人としての理解を重ね合わせてしまう危険をはらんでいる。こうした点を回避しながら考究する方法論の蓄積が必要である。

このような方法論上の問題点は、科学史から類推できるものに留まらないだろう。そこで、最後に情報学に眼を転ずる。北川敏男にならって情報史研究を考えれば、情報学における研究すべてが歴史研究にもつながるということになるが、ここでは、上田の行なった、高温超伝導材研究という限られた範囲における情報流通過程の様態を包括的に扱った事例研究<sup>15)</sup>を論ずる。

この研究は歴史研究を目的としたものではなく、むしろ最近における状況の変化を指摘することが意図されているようである。しかし、まず、一般理論を志向するのではなく事例の解釈・記述に集中している点が歴史研究に近い。

また、この研究を紹介している図書の全体は、情報メディアという概念を中核に、情報に関わる問題を情報の生産・流通過程という側面から追究するという立場で構成されている。この研究は、こうした情報に対する考え方の枠組みを事例に適用して解釈・記述したものである。すなわち、そうした立場において関心を引きつける多様な要因（情報メディアの特質や種類、関連する社会制度、情報生産・流通過程における機能、関与する人間の社会的・心理的背景など）を取りあげ、多様な観点からの分析を重ねることによって全体の様態を包括的に描

出している。

Eisenstein や村上の仕事と比して、この研究から情報史に関して示唆されることは、情報に関する考え方を定式化し、それを枠組みとして事例の探求を行なうことの有効性である。

さらに、この研究においては、多様な要因を包括的に扱いながらも、情報に対する関心が主要な動機となることが緊密性をもたらしている。また入念に検討された枠組みが背景にあるため、動的な過程を扱っていても、情報に関わる個別の要因の特質やその位置付けが見失われない。上述の A～E のうち、A, C, D, E の四つの側面が扱われ、有機的に組合わされていることが評価できる。すなわち、明示的ではないにせよ、情報史に関連する多様な観点を網羅した歴史観のひな形がこの研究に内在していると認められる。ちなみに、この図書のほかの章で、B にあたる情報概念の歴史も扱われているから、もっと別の事例ならば情報概念の影響を取りあげることもありえたのだろう。

あくまでこの事例研究は情報史研究として企図されたものではないから、今後はこうしたアプローチを時間軸方向に適用し、事象を歴史の流れの中で評価し位置付けるといった試みが期待される。

さて、ここでは3種類の範例を示したが、そのまま手順化することは難しいかもしれない。事例研究も歴史研究も、対象範囲により個別の特質が強くありそうである。

しかし、これらに倣うにせよ、独自に展開するにせよ、情報史研究の枠組みを考慮して進めることが望まれる。つまり、情報史のための枠組みを構築するという研究領域全体の作業と連動するために、各々の観点を明確にすることが望ましい。たとえば、どのような観点からどんな主題（側面）を重視して調査を行なうか、どのような要因を識別したか、またそれら要因の連関をどのように予測し、どのような歴史像を結果的に得たか、といった点を各々の研究において明記することである。一般の論文の「調査方法」に相当する部分で、集約して述べるのがよいだろう。

## V. 総括と展望

以上で論じたように、情報史研究とは情報現象を歴史的な観点から見ることであり、同時に歴史を情報（学）の観点から眺めることでもある。それによって情報学における歴史認識の進展がはかられ、情報の研究・教育へ

の貢献が期待される。

本稿では、情報史研究のあり方を論じ、緊密さを維持しながら研究を活性化させるために、歴史観を構築することの必要性を論じた。歴史観といっても、固定したイメージを歴史に投影するものではなく、情報に関する学術研究の過程と連携した動的な概念を支持した。

さらに、この歴史観の基盤となる枠組みを情報学の基礎研究から導出すべきだと論じた。情報史に関わる多様な要因を扱うことができるように多面的なものが望ましいと指摘したが、基礎研究そのものに関する議論が広範囲に必要なため、本稿ではそれ以上は進めなかった。

しかし、むしろ個別の情報史研究を活発に進めることがこの問題にも寄与すると考えられる。最後に示したように、いくつかの範例にならいながら、実質的な研究の累積が始まることを強く期待する。

なお、Le Coadic<sup>60)</sup>は、「情報学の歴史」の概念を検討する際、本稿と似た各論カテゴリのアイディアを示しており、多面性の点で筆者の年表<sup>23)</sup>にも視点が近いが、むしろ情報史全体の枠組みと関連づけて論じた方がよからう。情報史全体における情報学史の戦略的位置付けを中心とした継続研究で詳細に検討する計画である。

最後に、本稿を含め、研究の進行を常に支援していただいている慶應義塾大学の上田修一教授にあつく謝意を表す。また、愛知淑徳大学の津田良成教授の数々の教えは、常に筆者の考究の指針となってきた。深くお礼を申しあげたい。

## 引用文献

- 1) Stevens, N. D. The history of information. *Advances in Librarianship*. Vol. 14, p. 1-48 (1986) (情報史. 根本彰; 糸賀雅児訳. 情報の科学と技術. Vol. 42, No. 3, p. 269-283, No. 4, p. 371-383, No. 5, p. 475-482 (1992))
- 2) Vickery, Brian; Vickery, Alina. *Information Science in Theory and Practice*. London, Butterworths, 1987.
- 3) 北川敏男. “文明の歴史像: 情報史観へのプロレゴメナ”. *情報社会科学講座*. Vol. 17-II. p. 109-168. 北川敏男編. 東京, 学習研究社, 1979.
- 4) “歴史”. *哲学事典*. 東京, 平凡社, 1971. p. 1501-1503.
- 5) 津田良成, 糸賀雅児, 真弓育子. “1. 図書館・情報学とは”. *図書館・情報学概論*. 津田良成編. 第2版. 東京, 勁草書房, 1990. p. 1-38.
- 6) 津田良成. 知識情報を扱う図書館情報学とそのカリキュラム. *日本農学図書館協議会会報*. No. 75, p. 1-24 (1989) (再録: 津田良成. *図書館・情報学の創造*. 東京, 勁草書房, 1992.)
- 7) Machlup, Fritz; Mansfield, Una, eds. *The Study of Information: Interdisciplinary Messages*. New York, John Wiley, 1983, 743p.
- 8) 本沢滋. 情報と社会を考えるための視座: 情報化社会論の分析を通じて. 慶応義塾大学文学部図書館・情報学科卒業論文. 1988.
- 9) 小松崎清介. “訳者まえがき”. *新情報化社会論*. Lyon, D. 著. 小松崎清介ほか訳. 東京, コンピュータ・エイジ社, 1990.
- 10) Slack, J. D.; Fejes, F., eds. *The Ideology of the Information Age*. New York, Ablex, 1987. (神話としての情報社会. 岩倉誠一; 岡山隆監訳. 東京, 日本評論社, 1990.)
- 11) 梅棹忠夫. *情報の文明学*. 東京, 中央公論社, 1988.
- 12) Eisenstein, Elizabeth L. *The Printing Press As an Agent of Change*. Cambridge, Cambridge University Press, 1979.
- 13) Eisenstein, Elizabeth L. *The Printing Revolution in Early Modern Europe*. Cambridge, Cambridge University Press, 1993. (印刷革命. 別宮貞徳監訳. 東京, みすず書房, 1983.)
- 14) Shuman, Bruce A, et al. *Foundations and Issues in Library and Information Science*. Englewood, Libraries Unlimited, 1992.
- 15) 上田修一; 倉田敬子. *情報の発生と伝達*. 東京, 勁草書房, 1992. 228p.
- 16) Shera, Jesse H.; Cleveland, D. B. History and foundations of information science. *Annual Review of Information Science and Technology*. Vol. 12, p. 249-275 (1977)
- 17) Herner, Saul. Brief history of information science. *Journal of the American Society for Information Science*. Vol. 35, No. 3, p. 157-163 (1984)
- 18) (ASIS/ADI 設立 50 周年記念特集). *Journal of the American Society for Information Science*. Vol. 38, No. 5, p. 319-386 (1987)
- 19) (特集) Information science in America. *Bulletin of the American Society for Information Science*. Vol. 2, No. 8, p. 6-60 (1976)
- 20) Lilley, D. B.; Trice, R. W. *A History of Information Science*. San Diego, Academic Press, 1989. 181p.
- 21) 丸善 UTLAS センター編. *世界図書館情報関連年表*. 東京, 丸善, 1990.
- 22) 福田理. *科学技術文献入門*. 東京, 紀伊國屋書店, 1993.
- 23) 村主朋英. *情報・ドキュメンテーション年表*. 情報の科学と技術. Vol. 43, No. 4, p. 356-367

- (1993)
- 24) Rayward, W. B. Library and information science: an historical perspective. *Journal of Library History*. Vol. 20, No. 2, p. 120-136 (1985)
  - 25) Hayes, R. M. The History of library and information science: a commentary. *Journal of Library History*. Vol. 20, No. 2, p. 173-178 (1985)
  - 26) 根本彰; 松本浩一; 緑川信之. Librarianship, Documentation および Information Science の史的関係: J. H. Shera の見解を中心として. 図書館情報大学研究報告. Vol. 5, No. 2, p. 1-19 (1986)
  - 27) 慶應義塾大学文学部図書館・情報学科. 「情報」概念をめぐる基礎的検討: 図書館・情報学分野における情報研究の基盤として. 平成4年度慶應義塾学事振興資金による研究「「情報」概念の類型化」報告書. 1993.
  - 28) Ingwersen, Peter. Information and information science in context. *Libri*. Vol. 42, No. 2, p. 99-135 (1992)
  - 29) 村主朋英. 情報学思想史の枠組み. 1989年度三田図書館・情報学会研究大会.
  - 30) Barker, Larry L.; Barker, Deborah A. *Communication*. Sixth Edition. Englewood Cliffs, Prentice-Hall, 1993.
  - 31) Berger, Ch. R.; Chaffee, S. H., eds. *Handbook of Communication Science*. New York, Sage, 1987.
  - 32) Williams, Raymond, ed. *Contact: Human Communication & Its History*. London, Thames Hudson, 1981.
  - 33) 江藤文夫; 鶴見俊輔; 山本明編. コミュニケーション史. 講座コミュニケーション2. 東京, 研究社, 1973. [研究史の略述および年表を備える. 同講座第1巻はコミュニケーション思想史という標題.]
  - 34) Graeme, Patterson. *History and Communications: Harold Innis, Marshall McLuhan, the Interpretation of History*. Toronto, University of Toronto Press, 1990.
  - 35) Heyer, Paul. *Communications and History: Theories of Media, Knowledge and Civilization*. New York, Greenwood Press, 1988.
  - 36) Crowley, David; Heyer, Paul, eds. *Communication in History: Technology, Culture, Society*. New York, Longman, 1991.
  - 37) Borgman, Christine L.; Rice, Ronald E. The convergence of information science and communication: a bibliometric analysis. *Journal of the American Society for Information Science*. Vol. 43, No. 6, p. 397-411 (1992)
  - 38) Marvin, Carolyn. "Space, time, and captive communications history". *Communications in Transition*. Mary S. Mander, ed. New York, Paeger, 1983.
  - 39) 謝世輝. 人間と情報: ユーラシア文明の視点から. 東京, 新時代社, 1973.
  - 40) 鈴木徳三. 機能主義図書館学序説. 三田, 三弥井書店, 1975.
  - 41) 樺山紘一. 情報の文化史. 東京, 朝日新聞社, 1988.
  - 42) 濱下武志ほか. 移動と交流. シリーズ世界史への問い第3巻. 東京, 岩波, 1990.
  - 43) 歴史学研究会編集委員会編. 特集: 情報と歴史学. 歴史学研究. No. 625, p. 2-67 (1991)
  - 44) 丸山雍成編. 情報と交通. 日本の近世第6巻. 東京, 中央公論社, 1992.
  - 45) 山口修. 情報の東西交渉史. 東京, 新潮社, 1993.
  - 46) 宮崎正勝. イスラム・ネットワーク: アバース朝がつなげた世界. 東京, 講談社, 1994.
  - 47) 西岡芳文. 「情報史」の構図: 日本中世を中心として. 歴史学研究. No. 625, p. 2-8, p. 37 (1991)
  - 48) 編集工学研究所編. 情報の歴史. 松岡正剛監修. 東京, NTT 出版, 1990.
  - 49) 小山田了三. 情報学・情報史. 東京, 東京電気大学出版局, 1993.
  - 50) 村主朋英. Karl Popper の「客観的知識」概念とその情報学に対する意義. *Library and Information Science*. No. 24, p. 1-10 (1986)
  - 51) Fuller, Steve. *Social Epistemology*. Bloomington, Indiana University Press, 1988.
  - 52) Foucault, Michel. 知の考古学. 中村雄二郎訳. 東京, 河出書房新社, 1981.
  - 53) 吉田民人. 自己組織性の情報科学. 東京, 新曜社, 1990. 296p.
  - 54) 吉田民人. 情報と自己組織性の理論. 東京, 東京大学出版会, 1990. 295p.
  - 55) 糸賀雅児. 情報利用における「意味」と「理解」: 「意味付与」概念にもとづく情報ニーズの再検討. *Library and Information Science*. No. 29, p. 1-19 (1991)
  - 56) Kando, Noriko. "Information concepts reexamined". *International Federation for Information and Documentation*. 47th FID Conference and Congress at Omiya, Japan, October 5-8, 1994.
  - 57) 中山茂; 石山洋. 科学史研究入門. 東京, 東京大学出版会, 1987.
  - 58) 村上陽一郎. "科学史の哲学". 知の革命史: 1 科学史の哲学. 村上陽一郎編. 東京, 朝倉書店, 1980.
  - 59) 村上陽一郎. 科学史の逆遠近法: ルネサンスの再評価. 東京, 中央公論社, 1982.
  - 60) Le Coadic, Yves F. *Histoire des sciences et histoire de la science de l'information*. *Documentaliste*. Vol. 30, No. 4/5, p. 205-209 (1993)